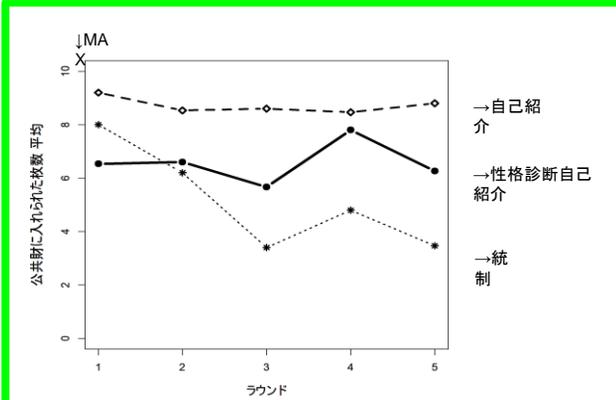


分析方法

分散分析によって各要素間に交互作用があるのかを分析した。その後、Holmの検定によってどの要素に有意差があるのかを検定した。

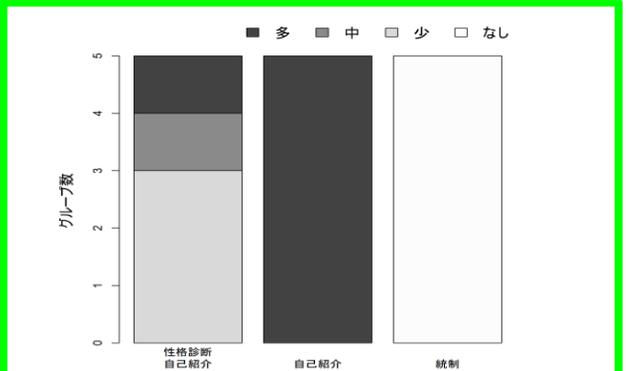
結果

ラウンドごとの公共財に入れられた資金の平均



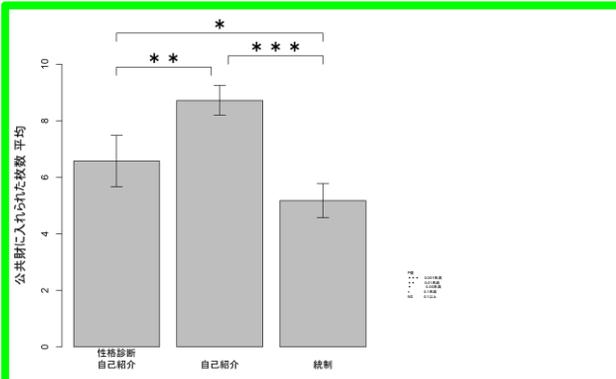
このグラフは、各条件におけるラウンドごとの公共財に入れられた資金の平均を表している。縦軸は、公共財に入れられた枚数の平均、横軸はラウンドを表している。このグラフから、自己紹介条件において公共財に入れられた枚数が多いということがわかる。

自己紹介における会話量



このグラフは、各条件の自己紹介における会話量を3段階で分類したものを表している。(統制グループは自己紹介なし) 自己紹介時間において沈黙時間を計り、その結果を参考に会話量を4つの尺度で主観的に分類した。

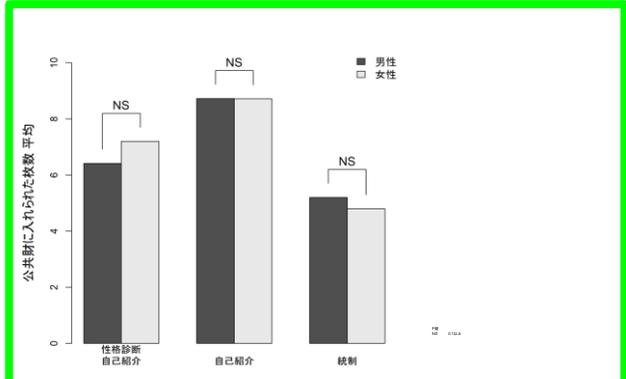
-条件間-



公共財に入れられた枚数に対する条件（性格診断自己紹介、自己紹介、統制）の効果を1要因の分散分析で検定した結果、条件の効果が有意であった。

性格診断自己紹介条件 > 自己紹介条件
自己紹介条件 > 統制条件
性格診断自己紹介条件 > 統制条件

-各条件と性別-



公共財に入れられた枚数に対する条件と性別の効果を2要因の分散分析で検定した結果、性別の効果が有意ではなかった。→「女性が多いから、自己紹介条件が高くなった」と言うことはできない。確認のためHolmの検定を行った結果、各条件間で有意な差が見られなかった。

考察と課題

考察

・相手と同程度の開示を行うと、相手に対して好印象を抱く。(小川 2000)
→自己紹介をした条件のほうが、自己紹介をしない統制条件よりもお互いに開示があったため、相手に対して好印象を抱いたといえる

・事実開示(住所、年齢、性格、家族など)があれば、人物像が作り上げられる。(岡本2006)
→制約が少ない自己紹介のみの条件は性格診断の内容を用いた自己紹介の条件よりも事実開示が多かったため、相手に対する親密度が上昇したといえる

課題

今回の実験では、自己紹介の時間が5分で統一していたが、自己紹介の時間としては適切ではなかったかもしれない。
→自己紹介の時間を操作して、協力的行動をはかるといいかもしれない